オウム真理教とマスメディアの影響力

大塚明子

今年一九九五年は、ほとんどの日本人にとって「オウム事件の年」として記憶されるだろう。市民に対する無差別テロとして全国民を震撼させた三月の地下鉄サリン事件の後、次々に明るみに出される異様な実態に、国民の目はTVに釘付けになり、教祖逮捕の日は、まるで全国民的な祭りにも似たクライマックスとなった。

このオウム真理教に関わる一連の事件を巡っては、松本サリン事件の報道で第一通報者が犯人扱いされたことなど、マスメディアのあり方が様々な形で反省された。また、教団の成立それ自体についても、マスメディアとのより深層でのつながりが指摘されている。多くの論者が、オウム真理教に限らず、現代の若者の間にオカルトや超能力への志向が広汎に見られることの背景として、現実感の希薄化と、それに伴うメディアの影響力の増大を指摘しているのである。

例えば、かつて「ウルトラマン」シリーズを書いた脚本家・市川森一氏は、「テレビ世代の子供たちは、現実と仮想現実（バーチャルリアリティー）の境界があいまいになっていると言われます」というインタビュアーに答えて、オウム真理教の施設サティアンが円谷プロのセットに似ていることなどから、「彼らが、ウルトラマンから七〇年代後半の宇宙戦艦ヤマトに至る疑似戦争ドラマに大きな影響を受けていることは、紛れもない事実として受けとめざるをえません」と述べている〔七月一九日付朝日新聞〕。

こうした議論を、どう考えたらよいだろうか。

＊

従来のマスコミュニケーション研究は、大きく三期に分けられる。一九二〇年代から戦前にかけては、戦時キャンペーンにマスメディアが果たした役割の大きさなどから、マスメディアの影響力は直接的かつ強大であるという強力効果モデルが主流であった。

こうした見解に異を唱えたのが、人々の投票行動がいかに決定されるかを一九四〇年の大統領選挙において調査したラザースフェルドらである。彼らによれば、人は誰でも、家族・親戚・友人・職場・教会といった、日常

的に接触する仲間としての「第一次集団」に所属している。そして人々は、マスメディアから得た情報をこの集団の内部で吟味することにより、投票行動を結晶化させていくことが分かった。

一九七〇年代に入ると、マスメディアが認知に対して及ぼす影響力を重視する議題設定機能論など、強力効果モデルの部分的な復活が見られた。だが、人々を日常的に取り巻く人間関係がもつ影響力への注目という限定効果モデルの中核は、今日でもその妥当性を失っていない。

人々は通常、一人で裸のままマスメディアに晒されているのではない。人間は社会的動物であり、ごく稀な例外を除いて、身近な人間によって自分の存在を是認されることなしには生きていけないのである。だから、この是認を獲得し仲間に入れてもらうために、人は社会のルールを受け容れる。

すると、人が小集団に閉鎖されて他の社会から切り離された場合、その小集団の是認を得なければ生きていけなくなるのだから、もはや自分にとっては存在しないも同様の全体社会のルールなど、棄ててしまったとしても何の不思議もない。従って、山岳に籠もった連合赤軍、密林に共同体を作った人民寺院など、人里離れた場所では、リーダーの資質や思想によっては、リンチや集団自殺などが容易に引き起こされてしまう。無差別テロに走ったオウム教信者も、けっして理解不可能な存在ではない。いったん小集団に取り込まれて全体社会から切り離されてしまえば、それは誰にでも起こりうることなのだ。

＊

こうした閉鎖的な小集団は、自らの凝集性を高めるために、外部の社会から否定的な視線を向けるのが通例である。自分たちこそが正義で、外部社会は間違っている——。こうした正義観を支える物語を提供したのが、オウム真理教の場合は特撮ヒーローものやアニメだったのかもしれない。

市川氏は、自分たちが子供に短絡的な社会観や正義観を与えてしまったことを反省しているように見える。しかし、子供向けの番組が「正義の味方が悪をやっつける」式の単純なものなのは、自然なことである。ほとんどの人は、こうしたメディア体験を通過儀礼として通り抜け、成長するに従って、正義に関わる複雑な問題を自分なりに考えていく。

従って、一部の若者たちが複雑な現実から退却し、幼少時に馴染んだ単純なアニメ的世界観に固着ないし退行することを選んだからといって、メディアの強い影響力が働いたということはできないだろう。むしろ、たまたま手近にあった馴染み深く共有しやすいメディア資源を彼らが利用した、というほうが真相に近いのではないだろうか。

現代の複雑な日本会社では、生きる意味を明確に与えてくれるホットな小集団に若者が吸引される社会的要因は揃っているように見える。だが現実には、ほとんどの者はどうにか社会の中に自分の生きる場所を見つけているのだ。そうした中で、なぜある特定の若者がオウム教団のような閉鎖的な小集団へと自らを囲いこんでいかざるを得なかったのか——。オウム真理教関連事件に関する私の問題関心は、そこに収斂していきつつある。